　イハビーラは政府の報道の番組をながめつつ、時刻に目を移した。
「…おもったより、すごいな。ラガウリという破壊神は。」
　１７:３０、東京管区気象台…気温零下２５度。一部区域ではmを超える積雪を確認。
「…しまった…」
　陽子が顔をしかめる。その陽子…そのそばには土岐遙、由女の二人もいる。
「どうした？」
「このままだとここが危ない。」
「…そうだが…ま、もうじきこの事件もすぐに終わる。それはもうあっけないぐらいにな。」
「それは聞いた。だけど私がいってるのはそういうことじゃない。」
「…？」
「この事件の本当の恐怖は今じゃないんだ。ラガウリという破壊神がそこまで狙ったのかどうかは知らないが…気付かないのか？」
　ちなみに側で聞いていた遙や由女も、「？」である。
「とにかく、この前線基地は放棄したほうがいい。私の権限でここのデータはすべてオオサカに回せ！　…はやくしろ！」
　陽子は側にいたウィミィ兵に檄を飛ばすと自身はコートとＤＤＳシステムを手にとる。
「どうするつもりだ。いきなり士官権限の欄用かね？」
「…気付いてないの？」
「ん？」
「…じゃあ、ここで死んでくれればいいわ。もっとも、その身体だと死なないんでしょうけど。由女、遙。ここから離れるわよ。寧々にも伝えて。一度、オオサカ本部に戻ると。」
「は、はい！」
　…なんだ？
　…私がきづかずにいること？
　持ち出された悪魔。氷点下２５度。積雪。事件の終了。吹雪の終焉。元に戻る時間。すべての終わり。元に戻る機構。そしてここは東京。
　ガタ。
「ゆってくれるわ、古宮陽子。」
　確かに地下にいるのはマズイ。非常にマズイ。
　イハビーラは苦笑して立ち去った陽子のあとを追いかけながら首都圏に展開しているウィミィ兵全員に引き上げを命じたのだった。

SSFW Outside Story

新世紀アリス伝／Face Earth

Ep02.　季節はずれの恐ろしさ

F＝PART / 決戦

＞Time 17:52
　全ての準備は整った。あとは決戦の時となる。
「…ヒーホー。ほほう…」
　甲斐那が前に立つ。
「…１人だけではあるまい。他にいるのであろう？」
「当然だ。」
　ラガウリの背後にもう１人。大神が立つ。
「…あの甲冑の中身か。からくり無しではあの小娘以下だな。」
「私に言わせれば、彼女の方が規格外と思うが…」
　甲斐那はそう答えたあと。
「しばし、付き合ってもらおう。」
　剣閃を交える。

　甲斐那と大神の二人に要求された役割は只の１つ。
　計画のポイントに連れ出す事。もっとも、その一番好都合なポイントから一時的に離れてくれたお陰で作業はしやすかったが。だからこそ僅か１０分たらずでセットアップは完了したのである。
「…大神君。風向きはどうだった。」
「…あいつの方向でしたよ。」
「こちらも同じだ。…なるほど、鷲羽という博士は頭が回るな。」
　剣閃を交えるなかで二人は合流し、軽く情報を交換する。計画の最低条件がこれでクリアした。あとは決行のサインを「放つ」。
「喰らえ…空裂断！」
「いけ…！狼虎滅却、天地一矢！」

　二人の奥義の一撃がラガウリの身体を捕らえる。
「ヒーホー！、無駄だ、無駄だぁぁぁーっ！！　…マハブフダイン！！！」
　再び空気が軋みを上げる。
　甲斐那は長い戦いで培った勘でとっさに呼気を止める。
　この冷え切った空気を肺にとりこめば致命傷になりかねない。
　大神はそれが遅れたのか倒れこむ。
「…ちっ…。」
　甲斐那は大神を担ぎ上げるとラガウリの視界から消えないように逃げ出した――否、おびき寄せた。

＞Time 17:56
　冷え切った空気を取り入れたために肺にダメージを負った大神は救護・回収人員となっていた花火に連れられて戦域を離脱した。だが、ラガウリはついに計画の位置にまでやってくる。
「ふはははは…再びそのからくりか。」
　稼動可能な霊子甲冑のうち、エリカの背後にはステイト、聖の二人。そしてグリシーヌ機の背後には甲斐那・刹那となった。
「再び、動作不全に陥らせてやろう…マハブフダイン！！」
「甘い、ヴァーン！」
「焔よ…行け！」
　マハブフダインの直撃をうける霊子甲冑。だが、エリカからの火線がラガウリの胸を穿つ。
「なに…？　…まあ、何らかの対処ぐらいおこなっていたか。」
　魔法では無力化できないと悟るとラガウリは詰め寄ってきた。対処もなにも、相手の魔法に合わせて炎の魔法を使うことで行動停止を防いだだけである。
「よし、いまだ！」
　エリカとグリシーヌの両機から何かが投げられる。そこにあわせるように火炎魔法が重なる。
「なんだ――」
　ラガウリがそれが何かと気付く前にそれは大爆発を起こした。
　なげたのはプロパンガスである。たっぷりつまったのを二つほど拝借したわけである。そして、その爆発音にあわせ、ブリザードの風の中に建物から薫、コクリコが既に用意された袋を切り裂いていく。そこから大量の粉が舞っていく。なかには黒い煤のようなものも混じっている。
　だが、ラガウリの身体は再生中でラガウリがそれに気付く気配はない。
　その粉は、砂糖に小麦粉に墨を砕いたものに木材の燻埋め用の木の粉といったものの集

まり。四方八方から撒かれたそれは短い時間ながらラガウリの周囲に集まる。
　ラガウリ＝キングフロストの雪を降らす方法は「自らが低気圧の目」になることで行なわれている。風は全てラガウリの元にあつまり、そこから上昇気流にのって雲を発生させているのだ。雪になっているのは単純に気温を下げているだけである。――それでもかなりの広範囲に行なっていることを思えばかなりのものなのだが。
　逆をいえば、風になにかを乗せておこなえば、かならずラガウリのもとにたどり着くという図式が成り立つ。これは鷲羽ちゃんが流した情報であり、作戦案の改良だった。屋根から、軒先から、とにかく粉が撒き散らされる。
　今ここに、薫が考案した最後の一撃が身を結ぶ。
「いけえええええっ！！」
　グリシーヌからプロパンの二つ目が、そして、やや坂になっていたのを利用してラガウリの背後からロベリアがプロパンガスタンクを転がす。
　そして…エリカは焼夷弾を装填、発射した。

＞Time 17:58
　その爆炎はブリザードと日没による闇の帳で視界が殆ど利かない議事堂でも見ることが出来た。
　闇の帳だからこそ見えた、ともいえる。ビリビリとガラスが振動したような気がしたが、それは吹雪によるものか、爆発によるものか。
「…頼む…成功してくれ。」
　議事堂にいる、全員の祈りだった。

　同刻。

キュドオォォォーーーーーーーーーーーンッ

　周囲の建物が吹き飛ぶほどの爆発がラガウリの身体に襲い掛かった。
　作戦の実行者たるほかのメンバーも想像を越えた衝撃波に驚いていた――否、驚く余裕があったのは光武の背後に居た巣ステイト、聖、式堂兄妹の４人だけだったが。エリカ、グリシーヌは衝撃波の直撃による振動で気絶、コクリコと薫は建物の中に飛び込んでいたが、壁の吹き飛んだことにより意識朦朧の重態になってしまった。
　ロベリアにいたっては衝撃波で１０mほどふっとばされたあと、６mも転がり、軟雪の中にめり込みとまった。
　プロパンの爆発も交えた粉塵爆発による熱量は、ブリザードに乗ってやってきた雪を瞬時に水蒸気に変えてしまい水蒸気爆発まで引き起こしたのである。
　もうもうたる白煙の中で、蠢く影がある。
　かなり小さくなり、キングフロストではなく、ジャックフロストの影絵となっていたが

…、それはまだ動いている。
「いくぞ、聖。」
「ああ…ステイト！」
　聖が炎の刀を手にする。
　聖がまだ熱覚めやらぬ煙の中に身を投じる。焼け付くような臭いが漂ってくる。だが、そんなことはお構いなしにラガウリ＝ジャックフロストを間合いに捕らえ…
「エルフラーム！！」
　ステイトの魔法が飛ぶ。炎がラガウリの身体めがけ飛来、聖はその炎に刀をあわせ、いっきに振り切った。
　聖の手に確かな手ごたえの後にラガウリ＝ジャックフロストの首が刎ね飛ぶ。
　そのまま聖は駆け抜け…煙の外へ出て倒れた。ステイトが煙をさけてその聖の下へ駆け込む。
「ヒーホー…まだ…まだだ…まだ…我は…」
　煙の中から声がする。
「まだだ、我はまだ倒れておらぬ――」
　白煙が消え、そこには元のサイズにまで小さくなったジャックフロストが居た。だが、もう身体を構成できないのか。
　ジャックフロストはそのまま雪の塊にかわり、黒い霧だけが残された。
「――なに？」
　一番驚いていたのはラガウリ。
「――馬鹿な…何故だ、我は耐え切った…何故だ、なぜ、崩れる――。」
　ラガウリの呆然とした声が途切れる。
「…く、あのものめ、たばかったな…いや…もとからそのつもりだったのか！」
　禍々しい気がこの場所を包む。
「…ラガウリ。何があったかしらんが…まだ、戦う気か。」
　甲斐那が刀を構える。
「…ふん。甲斐那、この姿の我にはなにをやっても無駄だ。それはお前がしっていることだろう。」
「…」
「…まあ、いい。あの者の言葉には嘘はなかった。今回は我が退こう。」
　黒い霧が霧散してゆく。立ち去ったらしい。
　ここに東京大寒波は終結した。だが、これは前半戦に他ならなかったのである。

「１８時を迎えたか。」
　イハビーラは陽子の運転する自動車の助手席でそう呟く。
「…悪魔の宴、終了？」

「ああ、そうだな。」
　積雪のために運転には最新の注意を払う。というより、徐行せざるを得ない渋滞なのだが。
「…緊急報道、どうなったかな？」
　由女が訊ねる。
「つけてみようか？」
　ラジオのスイッチをつける。
『ただいま、新たな情報が入りました。帝都区にて大爆発があったそうです。現在、この爆発がなんなのかは不明ですが…』
　民放局の報道が流れている。
「…ふむ。なかなか頭の回るものがいたのかもしれんな。」
「…どういうこと？」
「悪魔が相手だからといって霊力を使う戦力をぶち当てる必要は無い。今回放った悪魔はラガウリのものを除けば、すべて銃で片がつく。それを行なわなかった。日本連合もたいした事はなさそうだ…そう思っていたがな。なかなかどうして、やるではないか。」
　ラガウリはくっくっくっと咽喉で笑う。
「あの、ラガウリとてそうだ。なんのために力を揮うのかわかっていない。」
「無論、我が神として崇められる事だ。力を示すのが一番の得策であろう？」
　突然車内に黒い霧が現れる。幸い、停止時だったのでとくに何も無かったが…普段なら確実に事故になっていただろう。
「速いな。」
「…時限爆弾とは恐れ入った。どう転んでもお前は我との契約を果たせるというわけだったのだな。」
「そうだな。だが…どのみちあの身体ではたいしたことなど出来はしまい。」
　陽子は相当とんでもない事態になってるぞ、と、心のうちで突っ込んでいた。
「すまんが、今すぐに身体を進呈することはできない。今はこの妖精で我慢してくれ。」
　イハビーラはそういうと、ピクシーを呼び出し、ラガウリに憑くように言う。黒い霧はそのままピクシーに憑依したのだった。
「…ふむ。この身体は本当にたいした事の無い身体なのだな。」
「あまり、大きくなるような事はする必要は無いぞ。」
　イハビーラはラガウリ＝ピクシーを肩に乗せる。
「…主従…どっちなのかなあ…？」
「もとの身体で見るなら、イハビーラさんのほうになるね…」
　その二人の背後である意味、呑気な会話を行なう由女と遙であった。

１８時００分。この時刻をもって、全悪魔が消滅。ピクシーやブラウニーといった中立／友好的態度を取っていたものたちもなんの前触れもなく消え去った。
なお、このとき東京管区気象台から気温と天気が発表され、気温は東京都で零下３０度を記録。日没により急速に冷却化進んだと発表。
１８時０３分。議事堂に本件の主犯悪魔の撃退の報が入る。
１８時０５分。緊急報道で主犯悪魔が撃破されたことが公表。これにより帝都区及び、その近隣区域に出されていた避難命令が解除された。
１８時１２分。今回の事件――悪魔によるもの――の犠牲者の数が発表。死者７名（うち、６名はＧＳ）、重傷者５５名（内４０名はＧＳ及び救助班）。
１８時３０分。東京管区気象台より気温発表、零下１１度にまで回復。ただし、翌朝までは零下であろうという予測を発表。

なーんか…メインキャラ変わりつつあるような気がするが。